

# 両親・教師からの褒められ叱られ経験と自尊感情の関連について

## The relationship to self-esteem of experiences being praised and scolded by parents and teachers

井上清子\*

Kiyoko INOUE

**要旨：**親および教師からの褒められ経験・叱られ経験と自尊感情の関連について明らかにする目的で、大学生 252 名を対象に、質問紙調査を行った。自尊感情高群と低群において、褒められた経験・叱られた経験の頻度に差があるかを調べるために *t* 検定を行った。褒められた経験では、母親・父親・教師いずれに対しても有意差がみられ ( $p < .01$ )、自尊感情高群の方が低群よりも、児童期によく褒められたと感じていた。叱られた経験では、母親・父親・教師いずれに対しても有意差はみられなかった。また、母親では、「礼儀・思いやり」 ( $p < .01$ ) 「性格・態度」 ( $p < .05$ )、父親では、「学業」 ( $p < .05$ ) 「礼儀・思いやり」 ( $p < .05$ ) 「習い事・スポーツ」 ( $p < .01$ ) 「課題達成」 ( $p < .05$ )、教師では「礼儀・思いやり」 ( $p < .01$ ) 「習い事・スポーツ」 ( $p < .01$ ) で有意差がみられ、すべて自尊感情得点高群の方が褒められた経験が多いことが分かった。

**キーワード：**誉め、叱り、自尊感情、自尊心、児童期

### 1. 目的

Rosenberg (1965) は自尊感情を「自己イメージの中核的な概念で、一つの特別な対象、すなわち自己に対する肯定的または否定的態度」と定義している。また Brown (1998) は自尊感情の高い子どもの特徴を、今現在の自分自身に満足しており、自分の長所だけでなく短所についても心得ており、自分の能力や性格に対して非常にポジティブな感情を持っている。反対に自尊感情の低い子どもは自分の不完全さ不十分さに注意を向け、くよくよと悩む傾向が強いと述べている。しかし、自尊感情は高ければ高いほどよいというものではないことも指摘されている。自尊感情の高さとパーソナリティの権威主義的傾向やナルシズムとの間には相関がみられるからである。(佐藤 2009)

自尊感情に影響を与える要因としては、社会的階層、人種、宗教などよりも親子関係、親の養

---

\* いのうえ きよこ 文教大学教育学部

育態度などが関与している（古庄 2009）と言われている。褒められた頻度と自尊感情との間には正の相関がみられ（Felson & Zielinski 1989）、褒められる頻度が高い子どもの自尊感情が高いことが明らかにされている（箕輪・向井 2003; 福岡県青少年アンビシャス運動推進室 2010; 兄井ら 2013）。しかし、褒めることが常に望ましい行動を促進するとは限らないという指摘もある。（Kamins & Dweck 1999）教育関係の多くの書籍で、褒めることでポジティブな効果を生じさせるという常套的な見解が繰り返されているという批判（Henderlong & Lopper 2002）さえある。褒められた経験が自尊感情を高めることは多くの研究で確かめられているが、誰が何を褒めるのが効果的なのだろうか。また、叱ることの自尊感情への影響については、褒めることほど、明らかにはされていない。

本研究では、母・父に加え教師による褒められた経験・叱られた経験と自尊感情の高低の関係を明らかにし、教育や子育ての支援に活かすことを目的とする。

## 2. 方法

### (1) 対象

研究の目的と方法について説明し同意の得られた文教大学教育学部の大学生 252 名（男性 47 名 女性 205 名、平均年齢 19.66 歳 ± 1.12）。

### (2) 方法

大学の講義後に研究の趣旨を説明して質問紙を配布し、同意が得られた者から回答結果を回収した集団形式と、個別に知人に依頼し同意が得られた者に対して配布し回答結果を回収した個別形式を併用し、質問紙調査を実施した。回答は無記名とした。

### (3) 質問紙の構成

#### ①回答者の属性（所属、性別、年齢）

② Rosenberg が作成し、山本ら（1982）が邦訳した自尊感情尺度 10 項目。「あてはまる」5 点、「ややあてはまる」4 点、「どちらともいえない」3 点、「あまりあてはまらない」2 点、「あてはまらない」1 点の 5 段階評価で回答を求める。ただし、逆転項目は 5 点 ↔ 1 点、4 点 ↔ 2 点に換算してから加算した。）

③回答者が小学生の頃に両親および教師に褒められた・叱られた経験の頻度を 4 段階評定で回答する。また、褒められた・叱られた内容について、趙ら（2011）が褒められたことについての自由記述を元に分類した 7 つのカテゴリーから 7 つの選択肢を作成し、複数回答可で当てはまるものに○をつける。

## 3. 結果と考察

### (1) 自尊感情尺度の信頼性分析

自尊感情尺度の各項目に関して、信頼性分析を行った。α 係数は .844 であり、内的一貫性は十分であると判断した。

## (2) 自尊感情尺度の得点について

今回の対象者の自尊感情尺度の合計得点は最小値 10、最大値 50 であり、平均合計得点は 30.71（標準偏差 6.70）であった。10 項目すべて「どちらでもない（3 点）」を選択すると合計が 30 になることから、今回の対象者の自尊感情の平均値は高くも低くもないと考えられる。

自尊感情得点の合計点に男女差があるかを調べるため、*t* 検定を行ったが、有意差は見られなかった。そのため、男女を一緒に以下の集計・統計を行う。

## (3) 児童期に褒められた経験について

小学生の頃に両親や教師に褒められた経験について、4 段階評定で回答を求めた。（図 1）

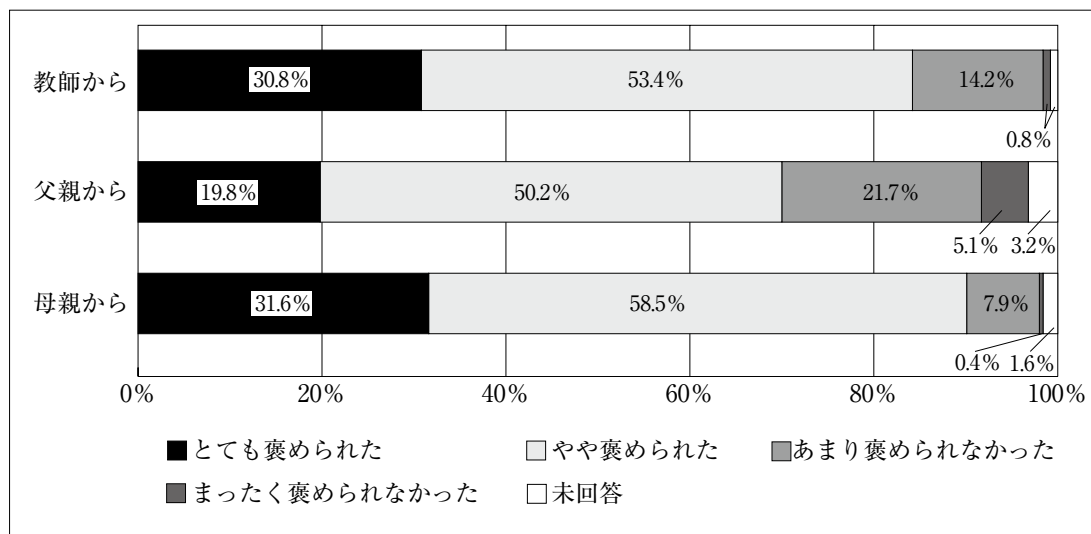


図 1 両親・教師から褒められた頻度

母については、「やや褒められた」135 名（53.4%）、「とても褒められた」78 名（30.8%）、「あまり褒められなかった」36 名（14.2%）、「まったく褒められなかった」2 名（.8%）の順に多かった。未回答は 2 名であった。「とても褒められた」「やや褒められた」と回答した学生は 213 名（84.2%）であり、約 8 割以上の学生が母親に「とても褒められた」もしくは「やや褒められた」と回答していることが分かる。

父については、「やや褒められた」127 名（50.2%）、「あまり褒められなかった」55 名（21.7%）、「とても褒められた」50 名（19.8%）、「まったく褒められなかった」13 名（5.1%）の順に多かった。未回答は 8 名であった。「とても褒められた」「やや褒められた」と回答した学生は 177 名（70.0%）と 7 割であり、母親よりはやや少なかった。一方、母親より多い 68 名（26.8%）の学生が「あまり褒められなかった」「まったく褒められなかった」と回答している。本当に褒められなかったのか、褒められたことが印象に残っていないのかは定かではないが、親は褒めつつも子どもに伝わらなければ意味がない。子どもの印象に残る褒め方をする必要があるだろう。

教師については、「やや褒められた」148 名（58.5%）、「とても褒められた」80 名（31.6%）、「あまり褒められなかった」20 名（7.9%）、「まったく褒められなかった」1 名（.4%）の順に多かった。未回答は 4 名であった。「とても褒められた」「やや褒められた」と回答した学生は 228 名（90.1%）であり、約 9 割以上の学生が教師に「褒められた」と回答しており、両親以上に教師に

褒められたことを記憶している者が多かった。調査対象者が教師を目指す者が多い教育学部の学生であることから、小学校時代に良い教師と出会っていたか、教師からよく褒めらる「よい子」であったことが推察される。

#### (4) 児童期に叱られた経験について

小学生の頃に両親や教師に叱られた経験について、4段階評定で回答を求めた。(図2)

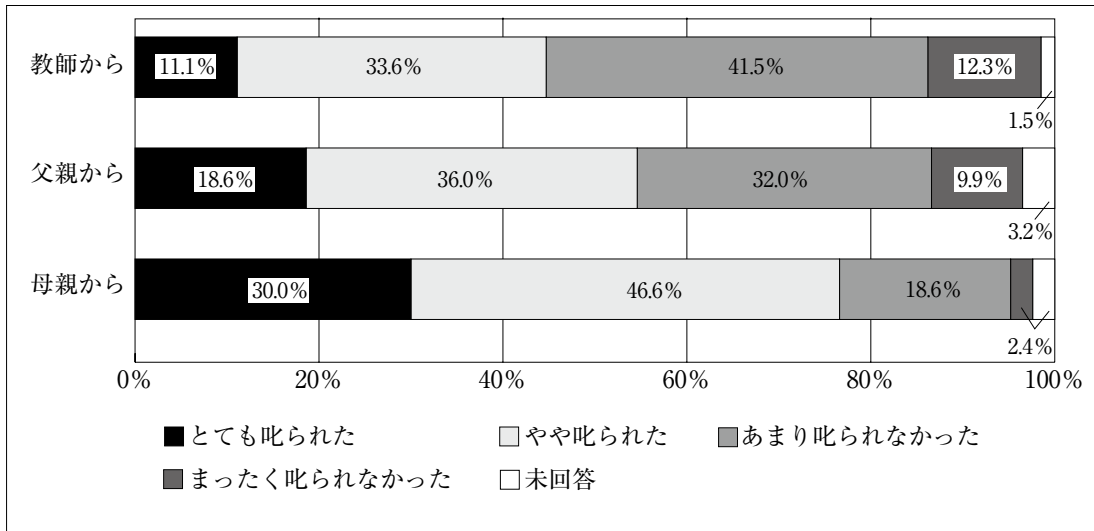


図2 両親・教師から叱られた頻度

母については、「やや叱られた」118名(46.64%)、「ととも叱られた」76名(30.0%)、「あまり叱られなかった」47名(18.6%)、「まったく叱られなかった」6名(2.4%)の順に多かった。未回答は6名であった。「やや叱られた」「ととも叱られた」がと回答した学生は194名(76.64%)と8割弱であった。母親は褒めることも多いが、子育ての中心人物として叱る場面も多くなるものと考えられた。

父については、「やや叱られた」91名(36.0%)、「あまり叱られなかった」81名(32.0%)、「ととも叱られた」47名(18.6%)、「まったく叱られなかった」25名(9.9%)の順に多かった。未回答は9名であった。母親同様「やや叱られた」という回答が91名(36.0%)で一番多かったが、次点は「あまり叱られなかった」で81名(32.0%)と近接している。「まったく叱られなかった」という回答も25名(9.9%)と約1割おり、家庭内の役割として父親は母親に比べてあまり叱らないのかもしれないが、父親の日常的な関わりが少なく母親が一手に子育てを担っている危険性もあり得る。

教師については、「あまり叱られなかった」105名(41.5%)、「やや叱られた」85名(33.6%)、「まったく叱られなかった」31名(12.3%)、「ととも叱られた」28名(11.1%)の順に多かった。未回答は4名であった。「あまり叱られなかった」「まったく叱られなかった」者が136名(53.8%)と過半数を占め、今回の調査対象が「よい子」が多いことが想像された。

## (5) 児童期に褒められた内容について

児童期に褒められた内容について複数回答可で選択を求めた。(図3)

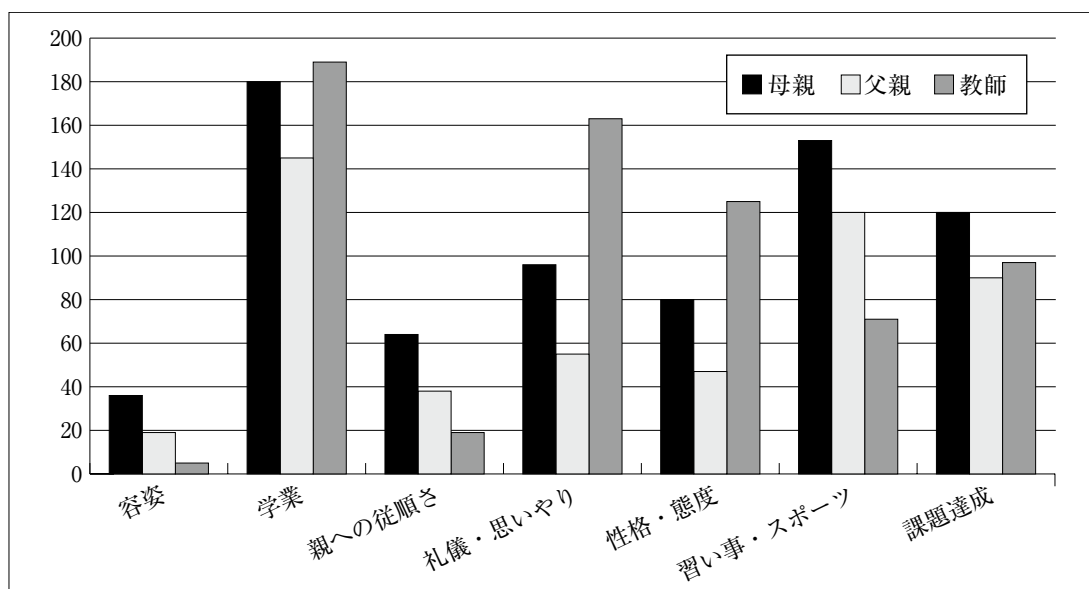


図3 両親・教師から褒められた内容

### 1) 母から褒められた内容

①学業（成績、勉強、テストなど）が180名（71.1%）と一番多く、次いで②習い事・スポーツ（習い事、美術、音楽、スポーツなど）153名（60.5%）、③課題達成（物事がうまくできた、よい結果がでた、何かをやり遂げたなど）120名（47.4%）などが多かった。④性格・態度（性格、生活態度など）は80名（31.6%）、⑤礼儀・思いやり（挨拶、礼儀正しい、思いやりがある、年上に対する敬いなど）は96名（37.9%）、⑥親への従順さ（言うことをよく聞く、手伝いなど）は54名（23.1%）、⑦容姿（顔、スタイル、服装、おしゃれセンスなど）36名（14.2%）、⑧その他は3名（1.2%）であった。

「学業」が一番、次いで「習い事・スポーツ」であるという結果は趙ら（2011）の研究結果と一致している。「学業」は、テストや成績などで、努力の成果が目に見える結果としてあらわれてくるので褒めやすいのではないだろうか。また「習い事・スポーツ」についても、技術の上達や勝敗などで成果があらわれるので、「学業」と同じく褒めやすいということが考えられる。

### 2) 父から褒められた内容

①学業が145名（57.3%）と一番多く、次いで②習い事・スポーツ120名（47.4%）、③課題達成90名（35.6%）などが多かったのは、母親と同様であった。次の、④礼儀・思いやり55名（21.7%）と⑤性格・態度47名（18.6%）は母親とは順位が逆転していた。⑥親への従順さ38名（15.0%）、⑦容姿19名（7.5%）、その他は0名であった。しかし、いずれの内容でも母親よりパーセンテージが低く、褒めること自体が少ないことが影響していると推測される。

### 3) 教師から褒められた内容

①学業が189名（74.7%）と一番多いのは母父と同様であったが、次いで②礼儀・思いやり163名（64.4%）、③性格・態度125名（49.4%）と、両親とは褒める内容に違いがみられた。④課題達成97名（38.3%）、⑤習い事・スポーツ71名（28.1%）、⑥親への従順さは18名（7.1%）、

⑦容姿5名(2.0%)、その他2名であった。褒める内容は多岐にわたり、いずれもパーセンテージは高かったことから、教師は子どもの様々な面を肯定的に評価して本人に伝えていることが伺える。特に、礼儀・他者への思いやりや性格態度などは、集団生活の中で、特に目につくため褒める機会が多いか、身につけて欲しいため意図的に多く褒めていることが考えられた。

#### (6) 児童期に叱られた内容について

児童期に叱られた内容について複数回答可で選択を求めた。(図4)

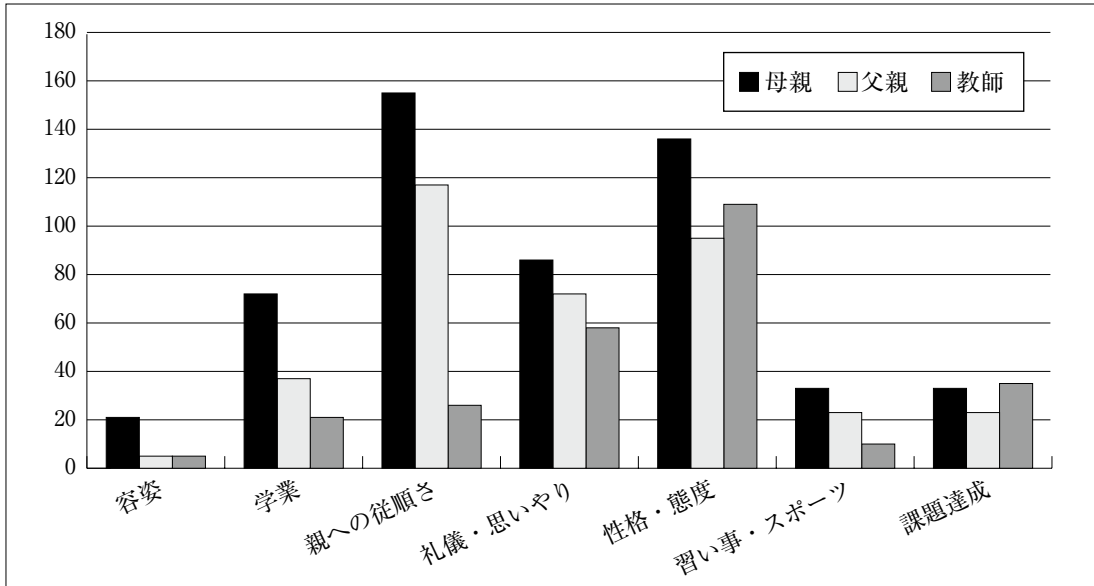


図4 両親・教師から叱られた内容

##### 1) 母から叱られた内容

①親への従順さ155名(61.3%)、②性格・態度136名(53.8%)は、半数以上が挙げていた。③礼儀・思いやり86名(34.0%)、④学業72名(28.5%)、⑤課題達成、習い事・スポーツ各33名(13.0%)、⑦容姿2名(0.8%)、その他は17名であった。

親への従順さや性格・態度、礼儀・他者への思いやりなどは、いわゆるしつけとして重要なことで、児童期ではまだ十分に身につけていないために、叱られることで直され身につけていくものと考えられる。褒められることで上位だった学業や課題達成、習い事・スポーツなどは、叱られることは少なかったことから、対象者は真面目で優秀な者が多いことが推測される。

##### 2) 父から叱られた内容

①親への従順さが117名(46.2%)、②性格・態度95名(37.5%)、③礼儀・思いやり72名(28.5%)、④学業37名(14.6%)、⑤課題達成、習い事・スポーツ各23名(9.1%)、⑦容姿5名(2.0%)、⑧その他は11名であった。

叱られた内容の順位は、母親の場合と全く同じであったが、いずれも人数は少なく、叱られたこと自体が母親より少ないことが影響しているものと推察された。

##### 3) 教師から叱られた内容

①性格・態度109名(43.1%)、②礼儀・思いやり58名(22.9%)、③課題達成35名(13.8%)、④親への従順さが26名(10.3%)、⑤学業21名(8.3%)、⑥習い事・スポーツ10名(4.0%)、⑦

容姿5名(2.0%)、⑧その他は8名であった。

性格・態度や礼儀・思いやりを挙げた者が多かったのは、両親の場合と同じであるが、親への従順さが低かったのは、当事者でないからであろう。「教師への従順さ」とすれば、割合が上がったかもしれない。

#### (7) 児童期に親や教師に褒められた・叱られた経験の違いと自尊感情

自尊感情尺度の平均得点が30.713であったことから、31点未満を自尊感情低群(127名)、31点以上を自尊感情高群(125名)とした。

また、褒められた経験・叱られた経験のそれぞれの選択肢を、「とても」1点、「やや」2点、「あまり」3点、「まったく」4点として、自尊感情高群と低群において、*t*検定を行った。(表1)

表1 自尊感情得点の高低と褒められた経験の*t*検定

対象	群	平均値	標準偏差	<i>t</i> 値
母親	自尊感情低群 (N=127)	1.96	.731	2.789**
	自尊感情高群 (N=125)	1.72	.630	
父親	自尊感情低群 (N=127)	2.30	.768	3.456**
	自尊感情高群 (N=125)	1.96	.779	
教師	自尊感情低群 (N=127)	1.84	.623	2.482*
	自尊感情高群 (N=125)	1.65	.748	

\**p*<.05, \*\**p*<.01

褒められた経験では、母親・父親・教師いずれに対しても有意差がみられ(*p*<.01)、自尊感情高群の方が低群よりも、児童期によく褒められたと感じていた。

叱られた経験では、母親・父親・教師いずれに対しても有意差はみられなかった。

この結果から、自尊感情得点が高い人は低い人より児童期に両親や教師から褒められたと感じていることが分かった。しかし、児童期に両親や教師から叱られた経験については、自尊感情の高群低群で有意差が出なかった。したがって、褒めることは自尊感情を高くする要因のひとつであるが、叱ることが自尊感情を低くするわけではない可能性が考えられる。あるいは、叱ることは褒めることほど、自尊感情の形成に与える影響は少ないと言えるだろう。

さらに、褒められた内容について自尊感情得点の高低によって違いがあるか調べるために、内容7項目について褒められ体験の有無と自尊感情の高低をクロス集計して $\chi^2$ 検定を行った。

母親では、「礼儀・思いやり」( $\chi^2=11.74$ , *df*=1, *p*<.01)「性格・態度」( $\chi^2=6.16$ , *df*=1, *p*<.05)、父親では、「学業」( $\chi^2=5.23$ , *df*=1, *p*<.05)「礼儀・思いやり」( $\chi^2=4.24$ , *df*=1, *p*<.05)「習い事・スポーツ」( $\chi^2=10.98$ , *df*=1, *p*<.01)「課題達成」( $\chi^2=5.93$ , *df*=1, *p*<.05)、教師では「礼儀・思いやり」( $\chi^2=7.68$ , *df*=1, *p*<.01)「習い事・スポーツ」( $\chi^2=10.33$ , *df*=1, *p*<.01)で有意差がみられ、すべて自尊感情得点高群の方が褒められた経験が多いことが分かった。

母親・父親・教師いずれにおいても、「礼儀・思いやり」について褒められた経験を持つ者が自尊感情高群は低群に比べ多かった。このことから、児童期に子どもが示した礼儀正しさや思い

やりを周囲の大人が共通して褒めることは、子どもの自尊感情を育む可能性が推察された。また、自尊感情の形成には親からの全面的な受容、愛情及び是認が必要である（蘭 1992）とされている。このような前提条件がない中でいくら子どもを褒めても自尊感情を高めることができない（兄井 2013）。子どもの自尊感情は、身近で重要な人物により、褒められたり認められたりすることで、自分自身の価値や能力が内在化した結果として育つ（Brazelton & Greenspan 2000）と考えられている。母親から「性格・態度」などその子ども自身の特性すなわち自分自身を褒められ認められることを基盤として、父親や教師から「学業」「習い事・スポーツ」「課題達成」など、その能力や努力の成果を褒められることによって、子どもの自尊感情は高くなる可能性があると思われた。

#### (8) 今後の課題

今回は、調査対象が文教大学教育学部であったため、小学校の頃に両親・教師から褒められることが多く、叱られることが少ない者が多かった。自尊感情も中程度で大きな偏りがある者は少なかった。自尊感情の高低群で叱られ経験の頻度に有意差は見られなかったが、対象が少なかり偏りがあるためである可能性は否定できない。今後は、対象を広げ人数も増やし、小学生の頃に加えて中学生の頃の褒め叱りの内容やその方法についてもさらに詳しく調査していきたい。

## 4. まとめ

両親および教師からの褒められ経験・叱られ経験と自尊感情の関連について明らかにする目的で、大学生 252 名を対象に、質問紙調査を行った。

自尊感情高群と低群において、褒められた経験・叱られた経験の頻度に差があるかを調べるために  $t$  検定を行った。褒められた経験では、母親・父親・教師いずれに対しても有意差がみられ ( $p < .01$ )、自尊感情高群の方が低群よりも、児童期によく褒められたと感じていた。叱られた経験では、母親・父親・教師いずれに対しても有意差はみられなかった。したがって、褒めることは自尊感情を高くする要因のひとつであるが、叱ることが自尊感情を低くするわけではない可能性が考えられる。あるいは、叱ることは褒めることほど、自尊感情の形成に与える影響は少ないと言えるだろう。

さらに、褒められた内容について自尊感情得点の高低によって違いがあるか調べるために、内容 7 項目について褒められ体験の有無と自尊感情の高低をクロス集計して  $\chi^2$  検定を行った。

母親では、「礼儀・思いやり」 ( $p < .01$ ) 「性格・態度」 ( $p < .05$ )、父親では、「学業」 ( $p < .05$ ) 「礼儀・思いやり」 ( $p < .05$ ) 「習い事・スポーツ」 ( $p < .01$ ) 「課題達成」 ( $p < .05$ )、教師では「礼儀・思いやり」 ( $p < .01$ ) 「習い事・スポーツ」 ( $p < .01$ ) で有意差がみられ、すべて自尊感情得点高群の方が褒められた経験が多いことが分かった。



## 引用文献

- 兄井彰・須崎康臣・横山正幸（2013）子どもの自尊感情と生活のあり方との関係についての研究，日本生活体験学習会誌，第13号，43-50.
- Brazelton, T.B. & Greenspan, S.I. (2000) *The irreducible needs of children: What every child must have to grow, lean, and flourish*. New York: Perseus.
- Brown, B.B (1998) *The Self*, McGraw-Hill.
- 福岡県青少年アンビシャス運動推進室（2010）子どもの自尊感情と生活のあり方との関係についての研究，福岡県青少年アンビシャス運動推進室特別レポート．
- 古荘純一（2009）日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのかー児童精神科医の現場報告，光文社．
- Henderlong, J. & Lepper, M.R. (2002) The effect of praise on children's intrinsic motivation: A reviews and synthesis, *Psychological Bulletin*, 128, 774-795.
- 箕輪早織・向井隆代（2003）叱り言葉・ほめ言葉と親子関係認知子どもの心理的適応との関係，日本発達心理学会第14会大会発表論文集，313.
- 蘭千尋（1992）セルフエスティームの心理学：自己価値の探求，ナカニシヤ出版．
- Rosenberg, M. (1965) *Society and adolescent self-image*, Princeton Univ. Press.
- 趙善英・松本芳之・木村裕（2011）回想された親の養育行動が大学生の自尊感情に及ぼす影響の日韓比較：行動分析的な解釈，*社会心理学研究*，第27巻第1号，1-12.
- 佐藤淑子（2009）日本の子どもと自尊 自己主張をどう育むか，中公新書．